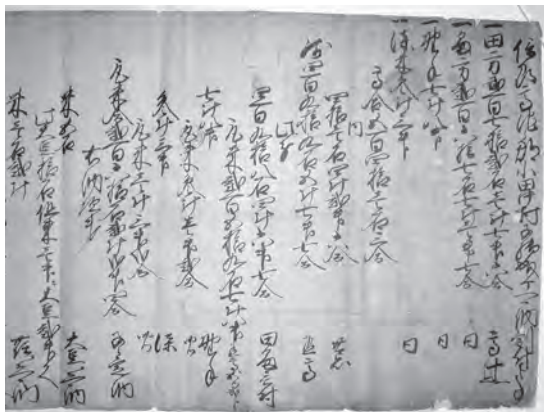


小林家文書一括が市指定有形文化財に指定されました

8月10日に開催された中野市文化財保護審議会の答申を受け、同月20日開催の中野市定例教育委員会で議決されたため、同月24日に小林家文書一括(946点)が中野市指定有形文化財に指定されました。

○小田中村の名主 小林家

小林家は、江戸時代に高井郡小田中村下組の名主を務めていた家で、年貢関係をはじめ、小田中村や周辺の村々に関わるさまざまな資料が多く残されています。



▲市指定有形文化財に指定された文書の一部

○江戸幕府の直轄領 小田中村

小田中村は、中野扇状地の南西部に位置し、江戸幕府が設置した中野陣屋がある中野村に隣接する村です。寛永元年(1624)以降、一時期を除いて江戸幕府の直轄領(幕府領)で、元文4年(1739)には89戸・341人、文政12年(1829)には120戸・549人の人々が暮らしていました。

明治22年(1889)には、明治の大合併によって下高井郡日野村の大字となり、明治27年(1894)には日野村から分離して、下高井郡中野町の大字となっています。

○江戸時代の年貢納入の様子や村の変遷がうかがえる

年貢関係では、年貢割付状(領主が村を単位として発給する年貢徴収状)・年貢皆済目録(領主から村に発給する年貢完済の受取状)が江戸時代初期を中心にまとまって残されています。

北信地域の幕府領では、周囲を山に囲まれているという地形的な制約によって、江戸時代の初期から、年貢は現物納ではなく現金納で行われて

ていましたが、小林家文書の年貢割付状・年貢皆済目録から当時の年貢納入の具体的な様子が分かります。

小田中村では、江戸時代中期以降、名主の選任や用水問題などによって、上組・下組の分離・合併を繰り返してきましたが、その際の取り決めなどから当時の村内の様子がうかがえます。

また、八ヶ郷用水の下流に位置する小田中村・更科村が、上流の中野村枝郷栗和田・松川村に対して、畑を田に転換すると水量が不足するとして、中野代官所に訴えている資料なども残されています。

○中野市の歴史を考える上で貴重な文書群

小林家文書は、『信濃史料』『長野県史』『中野市誌』『小田中区史』などを刊行する際に利用されており、早くからその存在を知られていた文書群です。

中野市域には、江戸時代初期の資料はあまり多く残されていませんが、小林家文書には江戸時代初期の年貢関係資料がまとまって残されていること、小田中村や周辺の村々に関わる資料が残されていることなどから、中野市の歴史を考える上で貴重な文書群です。

問い合わせ先
生涯学習課文化財係(豊田支所内)
☎3112

中野市合併10周年記念

広報クイズ

■今月のプレゼント

「南水(和梨)とラ・フランスセット
5名」…2人

問題

中野市音楽団体連盟に加盟している音楽団体はいくつ?
「●●団体」

クイズの答え、住所、氏名、年齢、電話番号、世帯主名を記入の上、今月の広報で参考になった記事、今後知りたい情報などはがきに書いて、次の宛先までご応募ください。

締め切り 10月30日(金)必着
※当選はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

先月号の答え 中野市のぶどうの収穫量は?
答え・・・「5200ト」

383-8614

(住所記載不要)

中野市庶務課
秘書広報係 行

住所・氏名・年齢・
電話番号・世帯主

柳沢富代さん
からのご紹介



○自己紹介

高校時代に行った全校登山で台風に見舞われましたが、暴風雨の後に現れた台風一過の見事な景色に感動し、それ以来山登りが大好きになりました。若い頃は3000級級の山にもよく登っていましたが、近ごろは志賀高原や高社山、箱山など妻と一緒に近場の里山を楽しんでいます。県の「自然保護レンジャー」としても活動しており、たくさんの人に山の魅力を知ってもらえればと、山でのゴミ拾いなどを行っています。

また、公民館講座がきっかけで、

絵手紙を楽しんで描いています。日常生活の中で触れた印象に残った言葉を書き留めておき、絵に添え、見してくれた人がほっとして癒されるよ



勝野 芳久 さん (金井)

うなものが作れたらと思っています。新聞やテレビなどから何気ない一言を見つけたら「宝探し」や、仲間と作品の感想や解説を語り合うのが楽しいひとときです。いずれも平和であつてこそその思いでやっています。

○元気の秘訣

自分がやっていることを誰かに喜んでもらえる、とても励みになります。山で出会った人や一緒に登ってくれた人に山の素晴らしさを感じてもらえたり、絵手紙を見てくれた人に共感してもらい、つながりが持てたことが実感できたりすると、とても元気をもらえます。

○おらほの自慢

研究熱心な農家の皆さんのおかげで、ブドウ、リンゴ、モモなど旬のおいしい果物が地元で味わえることは大変恵まれていると思います。

また、金井の秋祭りでは、高さ10メートルになる門灯籠を組み立てたり、ほかの地域へ出た人も集まってくるなど、年に一度の盛大なお祭りは村の誇りです。



▲絵手紙作品展での勝野さん

池田市長の

わくわくレポート

vol. 26



情報共有と
オープンコミュニケーション

市政運営に当たって、情報共有の大切さをつくづく思う。行政が抱える問題や課題は、それぞれが個別にあるのではなく、相互に関連しているものが多い。一つの課題を考える場合、考慮すべき事項は多々あり、限られた資源、財源の中で、未来志向の時間軸と空間軸で事を考える必要がある。政策遂行に当たっては、結論や提案に至る思考過程で、考慮した様々な事象とそれらをどのように考えたか、ということの情報共有が重要である。

例えば地域の公共交通をとってみると、交通問題はお年寄りの生活の足として、子どもたちの通学手段としてなど、日常生活に密接に関係している。こうした交通手段をどのように整備するかといった課題については、どの地区にどれだけの、どのようなニーズがあるかといった具体的なデータが必要だ。

翻って、一つの政策課題や地域の問題には複数の視点やさまざまな他の課題への影響があることは常である。地方創生の根っこには人口減少

という問題があるが、人口減少に歯止めをかけることは一つの目標であり、人口減少下で私たちの生活や暮らしをどのように豊かにするかといったことが本質的な課題であろう。最近手にした書物によると、若い人で生まれ育った地元で暮らしたいという人が増えているとの調査報告があった。某研究所の調査によると大学に進学した人の50%近くが地元に残りたいとの回答、また、資料は古いが2007年の内閣府の調査では、いま住む地域に永住したいとする若い人が43%で、約10年間で10%近くも増えているとのことである。こうした若い世代の思いに応えるためには、郷土に仕事があり生活ができる環境整備が重要である。若い人が増えることで、地域コミュニティが維持される。文化活動も盛んで暮らしやすいまちづくりは、都市基盤整備もさることながら、経済産業活性化政策など様々な政策領域への取組が要請される。若い人たちが集い、お年寄りや子どもたちと地域づくり、まちづくりに動かしむためにも、オープンな情報の共有とコミュニケーションの場がもっと必要だと思っている。